

幣 旗 邸 古 墳

中津市文化財調査報告書
第 4 集

1984

中津市教育委員会
有限会社 三興

序

幣旗邸 2 号墳は、有限会社三興による工場建設の際に発見されたものである。

近来、当地方においては宅地造成、工場建設など活発な開発事業が進められているが、そのために先人が残した文化的遺産を無に帰する様な事は先人の文化に対する冒瀆であり、開発する者にとって心しなければならない事であろう。

今回の幣旗邸古墳も、工場建設以前から担当局である中津市教育委員会社会教育課および大分県教育委員会文化課より事前に指示があり、保存良好な 1 号墳については建物の一部計画変更を行ない現状保存とし、2 号墳は記録保存調査を御願いし、我社としても文化財保護の一助として微力ながら協力させていただきました。

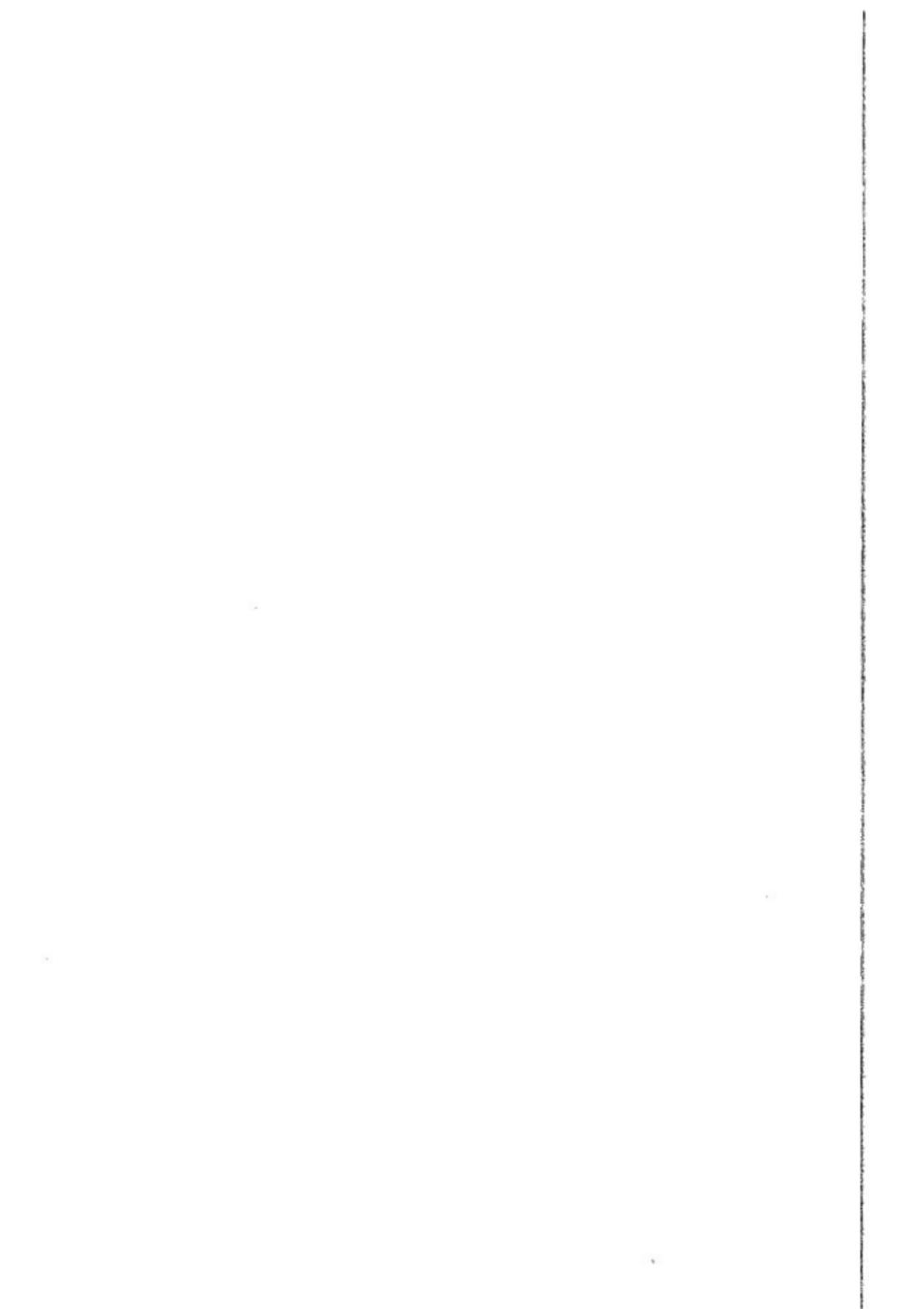
本書が郷土に対する認識と理解の資料として生かされるならば幸いと存じます。

最後に、調査に当たり、終始熱心に取り組んでいただいた中津市教育委員会社会教育課および大分県教育委員会文化課の担当職員の方々に対し深甚の謝意を表する次第であります。

昭和 60 年 3 月 31 日

有 限 会 社 三 興

代表取締役社長 香 川 隆 裕



例　　言

1. 本書は、有限会社三興の工場建設に關わる幣旗邱古墳発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、有限会社三興の委託事業として中津市教育委員会が遂行し、大分県教育委員会が援助した。
3. 調査団の構成は次のとおりである。

調査主体／中津市教育委員会

調査責任者／江 篤　　覚 中津市教育委員会教育長（前任）

調査事務／大木 代一 中津市教育委員会社会教育課課長（前任）

原田 知宣 中津市教育委員会社会教育課係長（前任）

上田 恵利子 中津市教育委員会社会教育課主事

調査担当／田中 布由彦 中津市教育委員会社会教育課主事

奥田 吉弘 中津市教育委員会社会教育課主事

清水 宗昭 大分県教育委員会文化課主査

村上 久和 大分県教育委員会文化課主任

吉留 秀敏 大分県教育委員会文化課嘱託（前任）

調査補助員／宮本 良和

4. 造構、出土遺物の実測は、調査担当者で行なったが、製図・淨書には酒野玲子氏の多大な援助を受けた。

5. 写真は、遺構については田中と村上が、遺物については県文化課小林昭彦氏の協力を得た。

6. 本書の執筆は、I、IIを田中が、他は、村上に行ない、編集は田中・村上で協議して行なった。

7. 調査にあたっては、下記の方々に歎寒の折にもかかわらず御協力を得た。

永岡トシ子、松本君子、松本キミエ

安武艶子、西本幸子

8. 発掘調査にあたって、前土地所有者である幣旗さと子氏には、多大な理解と御協力をいただいた。

9. 表紙の題字は市民文化センター館長 阿知波豊明氏の揮毫による。

目 次

I . 調査の経過.....	1
II . 遺跡の立地と環境.....	2
III . 遺跡の概要.....	4
IV . 調査の記録.....	6
1. 1号墳（円墳）.....	6
2. 2号墳（方墳）.....	6
V . ま と め.....	11

攝 図 目 次

第1図 山国川下流域古墳時代遺跡分布図.....	3
第2図 幣旗邱古墳周辺の遺跡.....	5
第3図 1号墳墳丘測量図.....	7
第4図 2号墳周溝土層図.....	8
第5図 2号墳出土物.....	8
第6図 2号墳実測図.....	9
第7図 2号墳主体部実測図.....	10

図 版 目 次

図版1 幣旗邱古墳付近空中写真.....	P L 1
図版2 幣旗邱古墳遠景.....	P L 1
図版3 2号墳全景.....	P L 2
図版4 2号墳周溝土層.....	P L 2
図版5 2号墳主体部.....	P L 3
図版6 "	P L 3
図版7 " (東壁)	P L 4
図版8 " 小口部(南壁)	P L 4
図版9 " 周溝遺物出土状態.....	P L 5
図版10 2号墳出土品.....	P L 5

I 調査の経過

大分県中津市大字相原字勘助野地に所在する幣旗邸古墳（1号墳）は、昭和45年に実施した県内遺跡分布調査によって発見された。その後、当古墳は、所有者である幣旗軍治氏により、保存処置がなされ現在に至っていた。今回、幣旗氏宅が杵築市へ移転するに伴い有限会社三興によって生コン工場建設の話が持ち上がった。そこで、中津市教育委員会により、昭和57年5月に宅地内全域の試掘調査がなされた。その結果、1号墳の南側に隣接して主体部に堅穴式石室を持つ方形墳（2号墳）が新たに検出された。10月に県文化課、市教委、有限会社三興の三者により協議がもたれ、1号墳については、工場建設を一部計画変更し現状保存とし、新たに発見した2号墳については、記録保存をすることになった。1号墳の保存については、中津市における埋蔵文化財保護の大きな成果であった。なお、2号墳の発掘調査は、昭和58年1月24日～2月3日の間に実行なされた。



発 挖 調 査 風 景

Ⅱ 遺跡の立地と環境

幣旗邱古墳の立地する台地は、通称下毛原丘陵と呼ばれる洪積世の低台地である。地質的には、下部より洪積世砂礫層一同風化礫層一ローム層一クロボク層一現表土の順に堆積している。眼下には、一級河川である山田川が流れおり、北方には、山田川の堆積作用で形成された沖積平野および周防灘を一望することができる。また晴天時には、周防灘より遠く下関・徳山などの周防・長門地方も望むことができる。当古墳周辺の遺跡については「垂水廐寺」⁽¹⁾「上ノ原遺跡」⁽²⁾などに詳細に書かれているが、再度古墳時代の遺跡について概観する。この地域に、弥生時代終末～古墳時代初期の墳墓が現われるには、山田川の自然堤防上に立地する上万田遺跡と八面山から派生する丘陵上に位置する岡崎遺跡である。両遺跡は、箱式石棺・石蓋土塚などが群在する墓地である。岡崎遺跡では、墳丘・馬溝などは認められないが、上万田遺跡では、周溝などが検出されている。

次に、4世紀末～5世紀前半に、勘助野地方形墳が出現する。これは、主体が箱式石棺・組合せ木棺・石蓋土塚で構成された一辺約20mの方形の周溝を持つ古墳であり、周辺に石蓋土塚などが付属することなどから地域首長墓と考えられる。また、これとほぼ同時期と考えられるものに法華寺石棺などがある。5世紀中盤になると篠山郡古富町に餘生古墳がある。これは主体部が堅穴式小石室であり、円筒埴輪を持つ円墳と考えられる。5世紀後半代には、幣旗邱古墳と同丘陵の斜面上に上ノ原横穴墓群が認められる。以上5世紀後半までの墳墓の立地を見たが、この地域の大きな特徴として前期の大型古墳がほとんど認められることである。これは、行橋地域あるいは宇佐地域に比べると対称的なことである。このなかで中津市下池永にあった鶴山古墳は、全長70mの前方後円墳といわれるが、土取りによって破壊され実体が不明であるのは惜まれる。6世紀代になると大規模古墳こそないが穴ヶ葉山古墳、上ノ熊古墳、巨石塚、天祚寺古墳など大型巨石墳が多数出現する。地域的に見ると山田川西岸の丘陵地帯（旧上毛部）には、横穴式石室を主体的に持つ円墳群が多数分布し、東岸の丘陵地帯（旧下毛部）には横穴墓群が多数存在し、そのあたり方に地域的特徴を示している。次に、古墳時代の集落跡は、今までのところ発掘調査による確認はないが、佐知遺跡、重吉遺跡、三口遺跡、川下遺跡、上万田遺跡、高畠遺跡など山田川下流域の自然堤防上に存在する。今後これらの諸遺跡と古墳群の対応関係を究明しなければならない。

註

- (1) 森田 勉ほか『垂水廐寺』 新吉富村教育委員会 1976
- (2) 村上久和ほか『上ノ原遺跡群』 I～III 1981～83
- (3) 中津南高郷土部『上万田遺跡』 1969
- (4) 昭和58年7月に三光村教委と大分県教委文化課で調査された。
- (5) 小田富士雄ほか『國為氏三考古資料集成』 古富町教育委員会 1983



地図番号	遺跡名	地図番号	遺跡名	地図番号	遺跡名	地図番号	遺跡名	地図番号	遺跡名
1	古墳	20	古墳	39	古墳	58	古墳	77	古墳
2	黒城山古墳群	21	古墳	40	古墳	59	古墳	78	古墳
3	横穴墓群	22	古墳	41	古墳	60	古墳	79	古墳
4	横穴墓群	23	古墳	42	古墳	61	古墳	80	古墳
5	横穴墓群	24	古墳	43	古墳	62	古墳	81	古墳
6	三ツ塚	25	古墳	44	古墳	63	古墳	82	古墳
7	一号墳	26	古墳	45	古墳	64	古墳	83	古墳
8	二号墳	27	古墳	46	古墳	65	古墳	84	古墳
9	三号墳	28	古墳	47	古墳	66	古墳	85	古墳
10	天神原古墳群	29	古墳	48	古墳	67	古墳	86	古墳
11	野辺田古墳群	30	古墳	49	古墳	68	古墳	87	古墳
12	会追一ツ塚	31	古墳	50	古墳	69	古墳	88	古墳
13	大平塚	32	古墳	51	古墳	70	古墳	89	古墳
14	横穴墓群	33	古墳	52	古墳	71	古墳	90	古墳
15	森	34	古墳	53	古墳	72	古墳		
16	悟	35	古墳	54	古墳	73	古墳		
17	集	36	古墳	55	古墳	74	古墳		
18	尾	37	古墳	56	古墳	75	古墳		
19	田	38	古墳	76	古墳	76	古墳		

第1図 山国川下流域古墳時代遺跡分布図

III 遺跡の概要

幣旗邱古墳は、下毛原丘陵と呼ばれる洪積世の低台地に立地する。丘陵は水田からの比高約15mである。当古墳の周辺には、多数の古墳が存在することが、昭和55年より行なわれている中津バイパス関係埋蔵文化財調査で明らかになった。

古墳時代の遺跡は、幣旗邱古墳の東側約100mに勘定野地1・2号墳がある。1号墳、一辺約20mの方形周溝を持つ低墳丘墓で主体部に箱式石棺・石蓋土塚・木棺を持ち周辺には土塚墓・石蓋土塚墓などもある。1号墳の中心主体部（箱式石棺）より鐵劍、櫛などが出土した。時期は、周溝より出土した壺形埴輪などから4世紀末～5世紀前半と考えられる。また、上人塚、鶴市神社裏山古墳などもこれとほぼ同時期と考えられるが、調査は行なわれておらず実態は不明である。5世紀後半～6世紀後半には丘陵斜面に横穴墓が形成されると同時に、北方約500mの所では、主体部に横穴式石室を持つ相原1・2号墳も存在したが、現在は破壊されている。このように幣旗邱古墳の立地する台地は、4世紀末～6世紀後半の墓地群であり、当古墳もその一群としてとらえることができ、工場建設予定地内には、多数の石棺墓・石蓋土塚などの存在が予想された。

調査は、宅地全体に7ヶ所のトレンチを設定して円墳1基、方形墳1基を検出した。北側端に石棺片が若干表土中に散乱していたが、遺構は検出されなかった。調査区は、全て後世に大きく削平をうけており、地山が表土下5～10cm前後で露出し、遺構の残存状態は、1号墳以外は悪かった。

1号墳は、協議の結果現状保存が可能となり周溝の調査と一部墳丘調査を行なった。その結果、径約20m、高さ1.5mの低墳丘の円墳で、墳頂部はやや平坦につくっている。遺物は、墳丘調査の際、トレンチの地山（風化ローム層）中より、蛭島産安山岩製の剝片石器を出土した。後期旧石器～縄文早期墳のものと思われる。1号墳の南側に2号墳がある。2号墳は、一辺12m程度の方形墳と考えられるが、北側と南側が後世の造成によって擾乱されており全体の形態は明確でない。内部主体は、割竹形木棺を持つ竪穴式石室であるが、これも後世の削平によって火半が破壊されていた。遺物は周溝から直口壺、甕などが散乱して出土した。



第2図 萩原町古墳周辺の遺跡

IV 調査の記録

1. 円 墳（幣旗邸 1号墳）

墳丘（第3図）円墳は丘陵の西側斜面側に位置している。墳頂部で標高38.5mを測る。マウンドの残存状況は良く、墳丘測量の結果、直径20m、高さ1.5mの規模をなしていた。

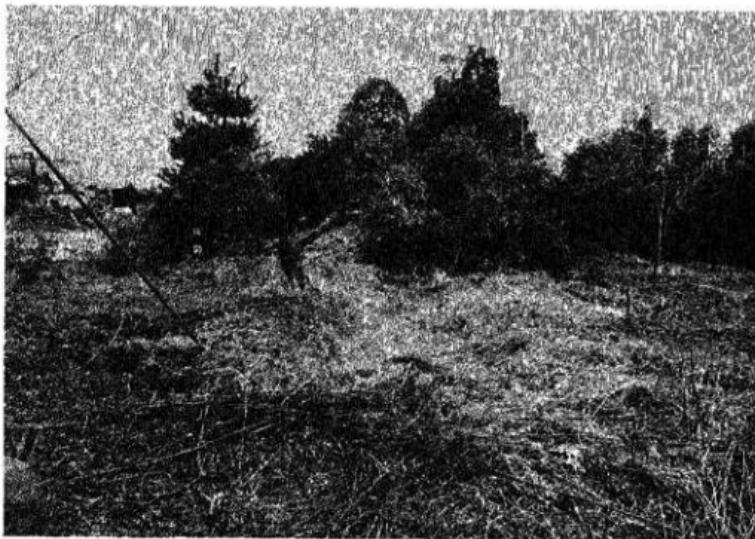
調査は、協議の結果現状保存の了解を得たので、古墳の範囲確認及び墳丘埋土の一部確認を行なった。その結果、南～東側は、造成を受けており、また、一部が道路下にあるため周溝は、確認できなかった。北～西側は、幅2.1m、深さ0.6mの周溝を確認した。墳丘は、旧表土上に、地山土を混入した埋土で形成されている。このことから本古墳築造にあたっては、自然丘を円形に掘り下げ、それをマウンドとして使用したと考えられる。

出土遺物は、墳丘確認の際、風化ローム層中より姫島産安山岩の剝片石器が出土した。

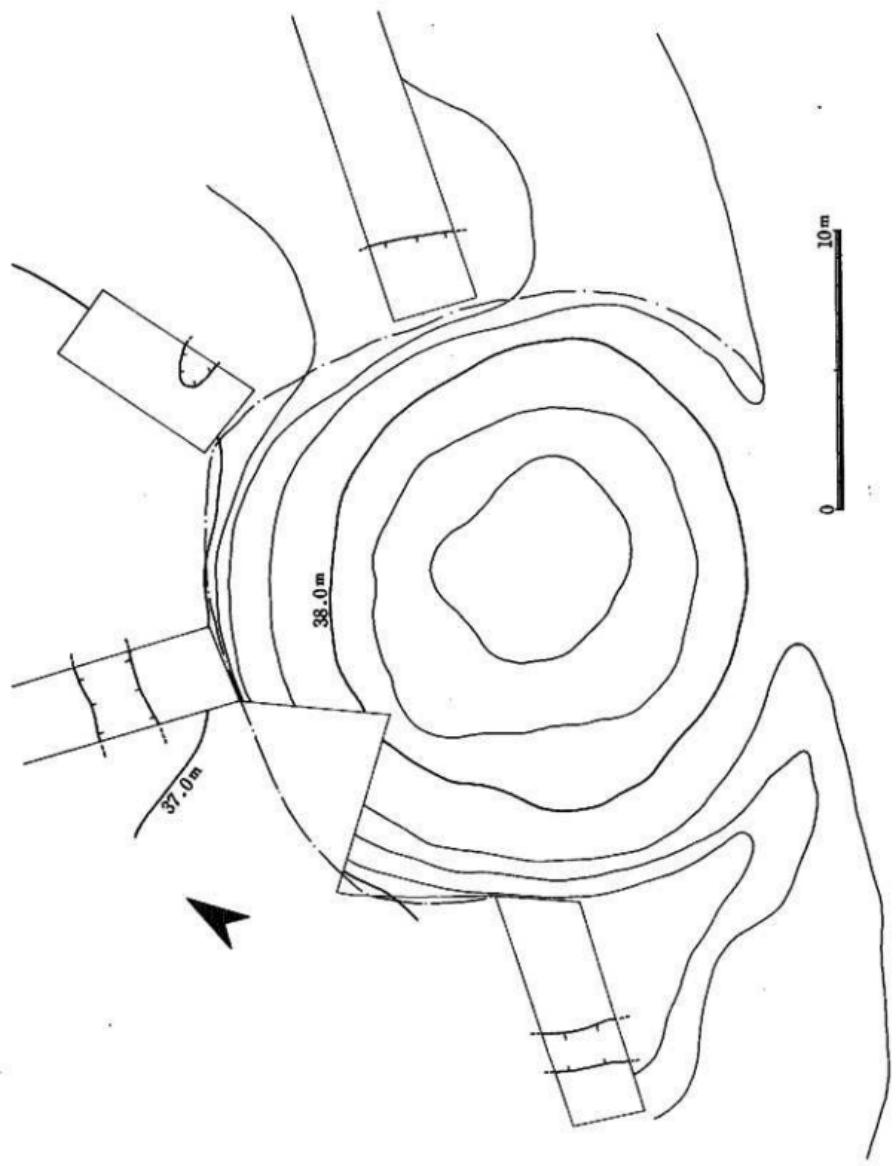
2. 方 形 墳（幣旗邸 2号墳）

墳丘（第6図、図版3）

1号墳の南側5mの所にはば隣接して立地する。墳丘は、後世の開発によって欠失するが、周溝の堆積状態からみて低墳丘があった可能性が強い。周溝は、方形を呈し、主体部をほぼ完全に囲んでいる。周溝の各辺の長さは南一北が10m、東一西が12mで南北溝が隙間部となり溝がめぐっていない。周溝断面は逆台形をなすが台状部（墳丘）側がゆるやかに立ち上っており、上端幅は、現状

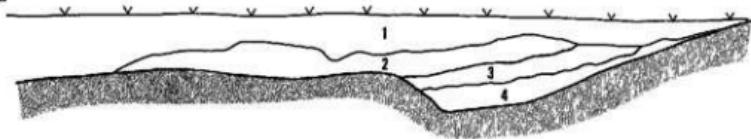


1号墳全景



第3図 1号墳墳丘測量図

37.212m

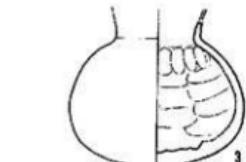
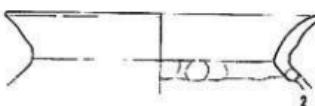
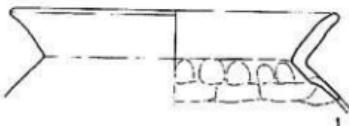


- 1層 灰黒褐色粘質土 ややハード表土
 2層 黄褐色粘質土 ハード、地山疊を含む。墳丘の流れ上
 3層 黒褐色 " ソフト、下面に土器を包含する。溝の流入土
 4層 灰黒 " ソフト、上面に土器を包含する。溝の流入土

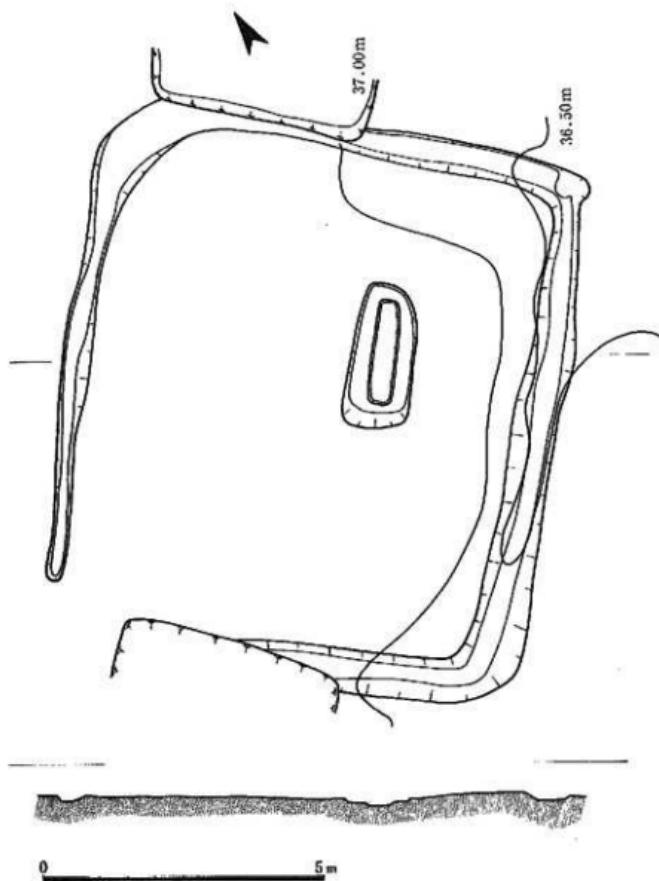
第4図 2号墳周溝土層図

で60~80cm、下端は30~40cm、深さは現状で20~30cmと場所によって若干異なっている。溝の覆土の状態(第4図、図版4)は、4層に分離でき、第1層が耕作土(現表土)、第2層は地山疊で構成されており墳丘の流失土と考えるのが妥当である。3・4は川溝の流入土であり3層は風化が著しく旧表土であった可能性が大きい。遺物としては東側周溝より、土師器壺および直口壺が溝底面より若干浮いた状態で出土した。

主体部(第7図、図版5)内部主体は、1基で、台状部の東側に位置する。全体に大きく削平を受けていたため、主体部の大部分が破壊されていた。残存した部分より判断すると、長軸中心線の方位はN-42°-Eで内法長1.8m同幅平均40cmの堅穴式石室である。北東側の側壁は石材がほとんど抜き取られて破壊が著しいが、およその形状は知りうる。東側壁は、9個の扁平な河原石を最下段におき、その上に河原石を積み上げ、南側小口部と接する部分は、河原石を半裁し、面を合わせている。南側小口部は、河原石をそのまま積み上げている。控え積みの石をふくめても割り石は二個のみでほとんど人頭大の河原石を使用した堅穴式石室である。また、短軸線の断面が舟底状をなすことおよび墓塙の形状から割竹形木棺が棺に使用されたことが推定でき、墓塙内に木棺片、朱等の検出を試みたが、何も発見されなかった。しかしながら墓塙の形状からも割竹形木棺を堅穴式石室内に配していたことは、ほぼ確実である。

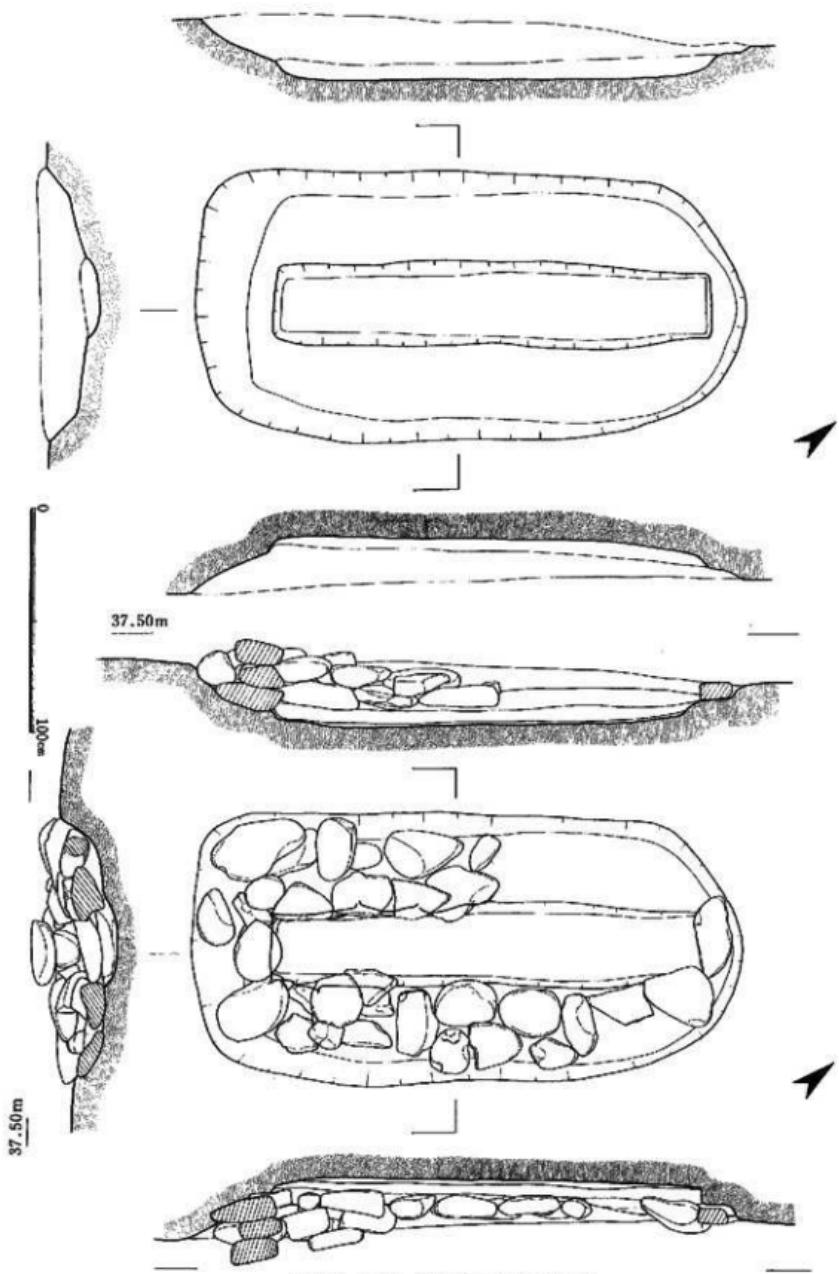


第5図 2号墳出土遺物



第6図 2号墳実測図

出土遺物（第5図、図版10）甕（1.2）は、東側周溝ほぼ中央に、溝底より6cmほど浮いた状態で発見された。1は肩部上半以下を全て欠く。復元口径16.8cmを測る。口縁部は短く外反する口頭をなし、口縁中央がやや肥厚し口縁端部に狭い面をつくる。内外面ともにヨコナデ仕上げである。肩部上半は、内部に掻きあげ痕が認められ、その上方には指圧痕が、下方には、ヘラ削りがそれぞれ認められる。外面はハケ日後にヨコナデ仕上げである。2は、復元口径16.7cmを測る。器形・調査など1とほぼ同じであるが、口縁端部を丸くおさめている。色調は、1.2ともに暗褐色を呈し、胎土は砂粒を含むが精微であり焼成は良好である。直口壺(3)は甕と同地点の溝底より6cmほど浮いて横転した状態で検出された。口縁端部は欠損するがほぼ完形品である。口縁部は短く上方に直立し口縁部径は、体径より狭い。内外面ともヨコナデ仕上げである。体部は最大径が中央より下半にあり、下ぶくれした球形を呈する。外面はナデ、内面は荒い横方向のヘラ削りで凹凸が著しい。底部は丸底で外面ナデ、内面は指ナデで凹凸が著しい。色調は淡褐色を呈し胎土には砂粒を含むがおおむね精微で焼成良好である。



第7図 2号墳主体部実測図

ま　と　め

築造年代 幌旗郡2号古墳の築造年代を周溝より出土した土師器および直口壺より考えてみたい。壺の特徴は口縁部が若干肥厚さみで端部は方形を呈しており、器底内面、は縦方向のヘラ削りが施されており巻き上げ痕が認められ、外面は、浅いハケ目とナデ消しが認められる。直口壺は、最大径が球形部下半にくる特徴を持ち、口縁部との接合部分に粘土紐巻き上げ痕が認められる。

豊前における土師器の編年作業は、京都平野と宇佐平野での資料をもとにすすめられている。柳田旗雄氏は、竹並10号墳・前田山祭祀（弥生終末）一下神田H石棺群1号祭（Ia）一赤塚古墳梅林方形周溝墓・赤塚西側方形周溝墓・竹並A-2号墳・前田山方形周溝墓（Ib）・竹並A-Ib=4号墳（IIa）一竹並A-15・19・H-2号墳（IIb）の編年案を考えており、Ia=3c中～後、c前半、IIb=4c後半とそれぞれ年代を比定している。また、小柳和宏氏は大分県内古式土師器編年表のなかで、赤塚古墳・赤塚西側方形周溝墓・赤塚梅林方形周溝墓（IA）一赤塚西南地区方形周溝墓（IIA）一赤塚第一発掘区（III A）としており、IA=3c末～4c中頃、IIA=5c前後と考えられている。柳田、小柳編年を比較した場合最古式土師器の実年代で若干の齟齬をきたすようであるが変遷は同一である。また、5世紀後半～7世紀後半の土師器については筆者らが竹並遺跡において古墳（横穴墓）出土資料を示している。しかしながら5世紀前半～後半までの約70～80年間の土師器資料が良好なかたちで認められなかったが、近年、行橋市下神田L地区4号住居跡^{註(4)}や宇佐市上浦遺跡^{註(5)}などにおいて良好な資料が発見されている。特に下神田遺跡では、小富上塙編年IA期に比定される須恵器とともに上師器塊・壺・高杯などが出土している。^{註(6)}

さて、このような中で、幌旗郡2号墳出土の土器をみた場合、粘土紐巻き上げ痕の認められる土器の特徴は、5世紀以前の土器には認められず5世紀中頃～後半に比定される下神田I-4号住などには認められる。しかしながら下神田L-4号住の壺に比べ口縁部の形態などはやや古相を示している。また、直口壺の特徴は、豊後地域ではあるが、玖珠町おごもり方形周溝墓^{註(7)}、竹田市堀圓円形周溝墓などに類似が認められ、5世紀中ごろ前後に比定されている。以上、土師器より推測される古墳の築造年代は、5世紀中ごろ前後に比定される。

竪穴式小石室について 4・5世紀における九州の古墳の主体部は、当時の激動を反映するかのごとく多様な展開を示している。豊前において竪穴式石室の導入は4世紀前半に比定される福岡県苅田町石塚山古墳（前方後円墳、三角縁神獣鏡14面、銅鏡、素環刀大刀出土）であり、これは畿内的な扁平削り石小口積みの大型竪穴式石室である。続いて4世紀後半には宇佐市免ヶ平古墳でこれも石塚山古墳同様大規模竪穴式石室をもつ。これらの二つの古墳はともに前方後円墳であり前者は舶載の、後者は仿製の三角縁神獣鏡が副葬されており、共に畿内政権と深いかかわりを示している。しかしながら、この時期の中・小の古墳（通例在地型古墳と呼ばれる）は、箱式石棺・石蓋土塚墓などの主体部が多数をしめる。

上野裕志氏は、福岡県を中心に竪穴系石室を三大別している。A型は、扁平削石小口積みのいわ

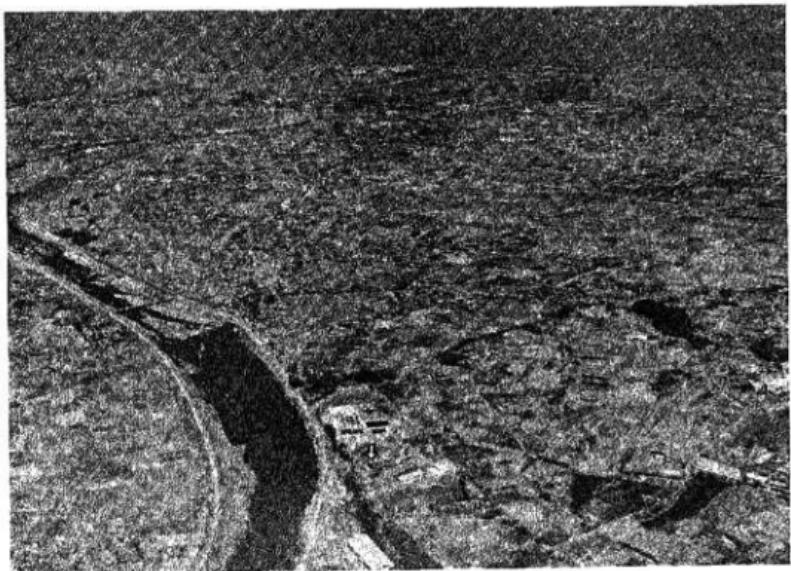
ゆる畿内型のもの、B型は、箱式石棺と畿内型の大型堅穴式石室を折衷した堆石積みの堅穴式石室で箱式石棺が堅穴式石室の影響を受けた九州型堅穴式石室とでもいべきもの、C型は、B型よりより箱式石棺に近いものとしている。また、山中英彦氏は、上野氏のB型を箱式石棺との折衷とは考えず、明確な捺え積みを行す純粹な堅穴式石室と考え、馬平割石小口積みの畿内型（I類）、畿内型を受容し伝統的墓制を脱した堆石積みの堅穴式石室（II類）、箱式石棺を母胎に堅穴式石室を導入した石棺系石室（III類）の3分類を行なっている。そしてI類の堅穴式石室を持つ古墳は4・5世紀代の九州を代表する古墳で、大和政権との直接的かつ有機的関係をもつ首長墳とする。II類は5世紀代に成立し、伝統的な箱式石棺から堅穴式石室へと転換した傾向があるとし、この時期にII類の背景となる首長層まで大和政権の身分秩序が浸透した結果とする。III類の石棺系石室は、五世紀代に流行し箱式石棺という伝統的墓制を払拭しきれぬもので、その被葬者は、同一平野に存する農業共同体と密着した支配者層を想定している。このような山中氏の指摘は、ほぼ肯定しうるものであろう。

さて、このような山中氏の指摘のなかで、当古墳を含む農前南部の堅穴系石室を見た場合、I類の堅穴式石室の採用は、四世紀後半代の宇佐市、川部・高森古墳群中の免ヶ平古墳（前方後円墳、三角縁神獣鏡、石劍、鉄劍、鉄刀など出土）において認められる。II類は、当古墳以外に篠山郡吉富町の五世紀中頃～後半に比定される榆生古墳（円墳・直刀・鐵鎌・鐵矛出土、円筒埴輪を持つ）があり、I・II類は山中氏の指摘に合致する。しかしながらIII類については、近年、川部・高森古墳群中に、布留古式並行期の方形周溝墓の主体部に形態上類似するものが発見されている。これは、宇佐地域獨特のものではあるが、I類石室成立以前にIII類の石棺系石室が成立すると考えられ注目すべきものである。正式報告を待って再度検討したい。なお農前地域の在地型古墳の主体部の変遷は、宇佐地域では箱式石棺→石棺系石室→河原石積堅穴系横口式石室、山田川流域では、箱式石棺→石棺系石室→横穴墓、京都府地域では箱式石棺→（粘土塗）→堅穴系横口式石室、となりそれに一部木棺墓・石蓋上埴輪などが加わる。これで解るように、在地型古墳の主体部は、地域の時期によりバラエティーに富む特徴を示している。

最後に、上ノ原古墳群中の当古墳の位置づけを見ると、四世紀末～五世紀前半代に勘助野地1号方形墳（主体部箱式石棺、鉄劍、鉄鎌、鉄鎌、勾玉、管玉、竹櫛など出土、壺形埴輪を持つ）+周辺土塙墓というあり方から五世紀中頃には、陪葬邱一号墳（円墳、主体部不明）+周二号墳（方形墳、主体部堅穴式小石室+削竹形木棺）というように変化する。これは、畿内政権の身分秩序が時代が降るにつれ、より下層へと浸透していくことを示す。（2号墳は、「堅穴式小石室」・「削竹形木棺」とより畿内の色彩が強い）とともに古墳築造主体者から見れば、身分的自立化をしていったことを物語っていると考えられる。このように陪葬邱2号墳の被葬者は、主体部の様相から畿内政権の官僚組織の下部構造の一員として承認されたと同時に地域においては、同一平野における農業共同体と密着した支配者層としての立場を有する人物と想定できよう。

- 註 (1) 柳田 康雄 「三・四世紀の土器と鏡」 古文化論集下巻 1982
- (2) 小柳 和宏 「大分県下の古式土師器」『袖野遺跡』 竹田市教育委員会 1983
- (3) 竹並遺跡調査会『竹並遺跡』 1975
- (4) 長嶺正秀『下神田遺跡調査概報』 行橋市教育委員会 1984
- (5) 未報告であるが、小倉正五氏の御教示による。
- (6) 小田 富士雄・武末 純一 「須恵器のはじまり」 北九州市立考古博物館 1984
- (7) 渡谷 忠章 「おごもり遺跡調査概報」 玖珠町教育委員会 1977
- (8) 小柳 和宏 「皆生台地と周辺の遺跡」 XI 竹田市教育委員会 1984
- (9) 上野 稲志 「七夕池遺跡群」 志免町教育委員会 1974
- (10) 山中 英彦 「東宮ノ尾古墳群」 北九州市教育委員会 1974
- (11) 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館宮内亮巳氏の御教示による。

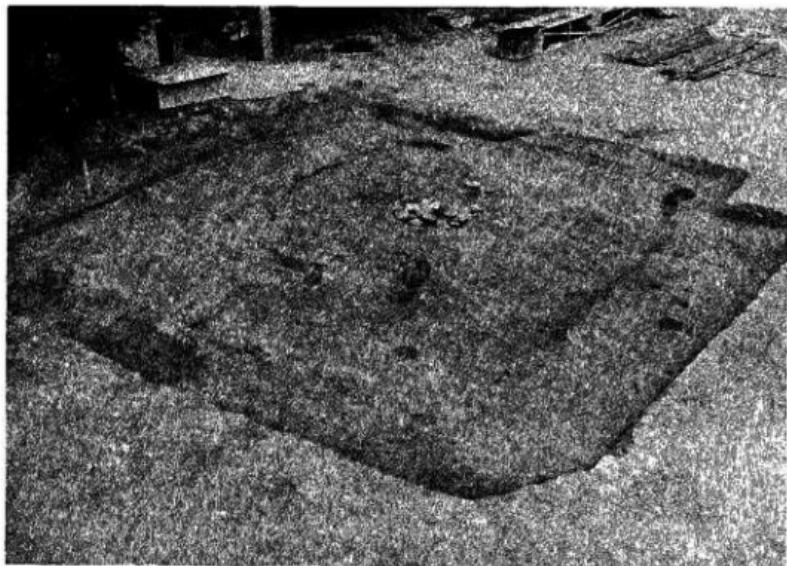
最後に本報告書作製にあたり、『七夕池遺跡群』、『恵子若山遺跡』『東宮ノ尾古墳群』『古文化談叢(4)』を参照させていただいた。記してその筆者に敬意を表したい。



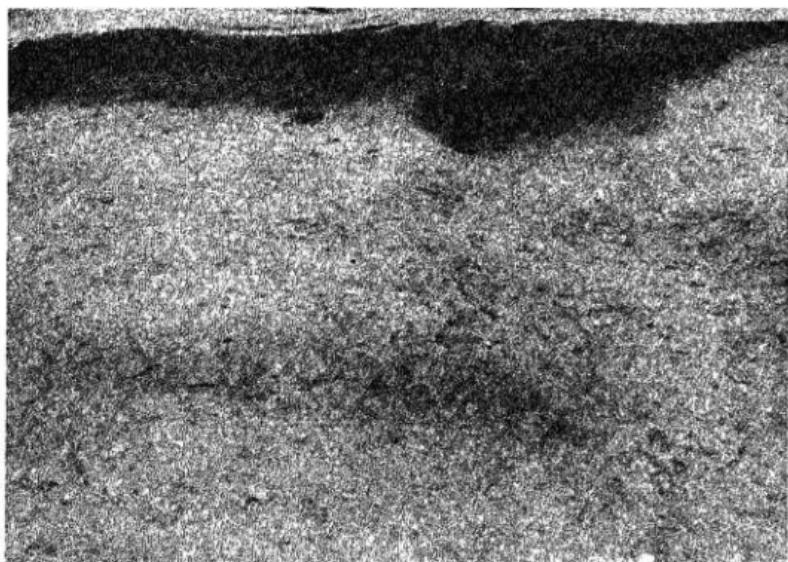
半旗部古墳付近空中写真



半旗部古墳遠景



2号墳全景



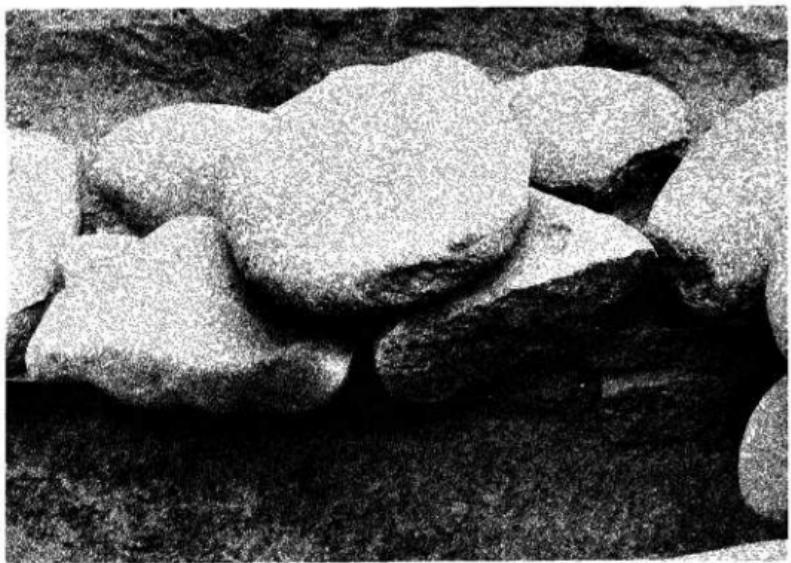
2号墳周溝土層



2号墳主体部
(河原石積み竪穴式石室)



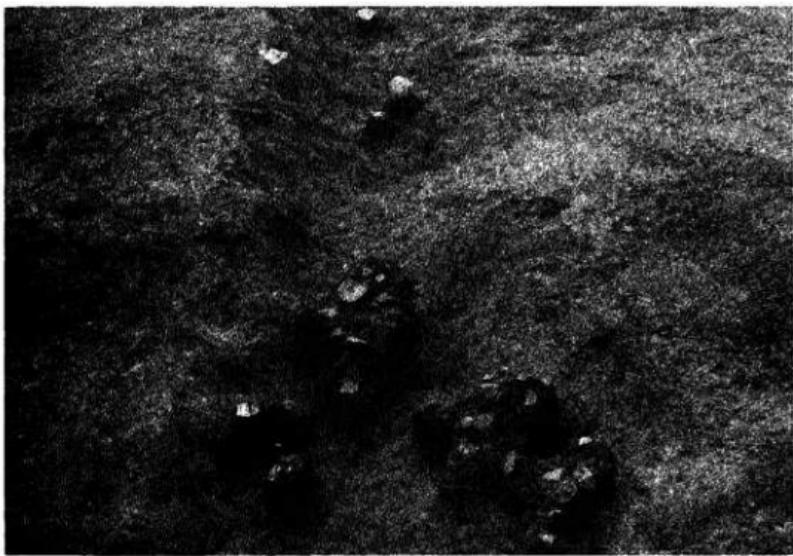
2号墳主体部(木棺)



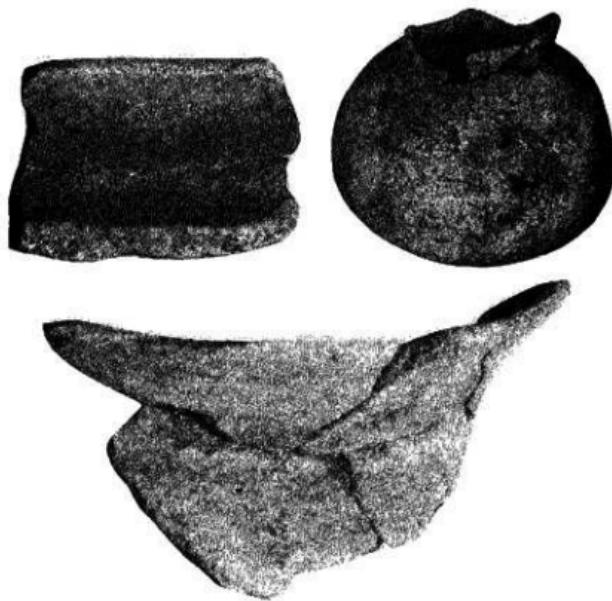
2号墳主体部（東壁）



2号墳主体部（南壁）



2号墳周溝遺物出土状態



2号墳出土遺物